

「おうちがあるからこそ。」

山村光春

絵・つきまいくよ

「私たち、もし付き合うってなったら、どんな感じなのかなあ」
木々の葉っぱと、暮れなずむ光が黄金色に溶け合って、
切なくて温かいムードを醸すいつもの公園の、いつものベンチで、
たとえばよ、たとえばだからね、と念を押し押し彼女は言う。

確かに、僕らは出会ってからもうずいぶんと月日が経っていたし、
その間、たびたび逢瀬を重ねていたし、
ましてや、おたがいのツボをモミモミしあうほどの仲である。
話が持ち上がるのはちっともフシギじゃないどころか、
むしろ周りから言わせれば、遅っ、てくらいだと思う。
なのに僕は、その言葉に本気で面食らい、困惑してしまった。

「ごめん。うそうそ、何にもない。はい、終了。深掘り禁止」
彼女はキャラにないことを口にした自分がよっぽど照れくさいのか
両手をいろんな方向にアタフタ動かしたかと思うと
サッと身を翻し、スタコラと帰っていった。
結局、僕はただのひとことも言い返すことができないまま。

ひとりぼっちになって、僕はあらためてじっくりと考えてみた。
それは彼女のことを好きとか嫌いとか、
付き合いたいかどうかとかいう、ロマンティックな想像では決してなく、
付き合ったらどうなるのだろう、という単純な興味だ。
同時に、これまでそういうことに関して
僕が無頓着だったことに気づき、驚いた。

まず、僕らは基本的に約束というものをしない。メールも電話もしない。
それぞれが、時間の空いた時にこの公園に来る（前は川のほとりだった）。
会えればもちろんうれしいけれど、
会えなかったとしても、それはそれでかまわないと思っている。
きっと彼女もわかりだろう。
あまりにも自由。あまりにも好き勝手。
ともかく、こういう関係が許されるなんてめったとないことだし、
そういう意味でもものすごく貴重な人材だし、
とてもとても感謝してる。

「そやし、感謝してることもいっこあんねん」
思ったことを、次に彼女に会った時告げると、
「え、なになに、それ」とぶりんぶりんのもち肌をした
好奇心いっぱい顔の顔を、ぐっと近づけてきた。
そのくせ僕がじっと見返すと、彼女はやめて、と照れくさそうに目をそらす。
「見すぎ。もっと時々ちょっと目を外したりしてくれないかな」
「外すタイミングが分からない。どのくらい？何秒ごと？」
「どのくらいって・・・5秒とか、そんなものかな」
「1、2、3、4、5（そらす）、こんくらい？」
「あ、いいかも。ちょうどいい」
そんな奇妙な会話がひとしきり続き、落ち着いてから、彼女は言う。
「で、感謝ってなに？」
「あ、そうそう。いやな、おそとの気持ちよさを知ったことかなって」

今までどちらかというひとりで家にこもりきりだった僕が、
彼女と会うようになってから、ことあるごとにおそとに出向くようになり、
そこでじっとただ座ってる、なんてことも多くなった。
すると、だんだんおそとの距離の取り方がつかめてくるというか、
ちっとも、退屈することがなくなってきたのだ。
本を読んだり、音楽を聴いたりもちろんするけれど、それ以上に
刻一刻と移ろいゆく風や光、音、景色、気温。通り過ぎて行く人、鳥、虫。
それらにくうっと注意を凝らし、心を澄ますこと。
暑きゃ暑いなりに、汗をいっぱいカキカキごっこをすとかか、
寒きゃ寒いなりに、マフラーグルグル巻きごっこをすとかか、
その時の置かれた状況を楽しむということ。

まさにマイ人生、心のベスト10に入るくらいの大きな意識の変化だった。

「なるほど。確かにそうかも」
なんて口ではつぶやきながらも、やや複雑な顔をしながら、空を見上げている。
そう。空をいつでも見上げられるのも、おそとの醍醐味かもしれない。
「私もね、おそとってどこにいてもいいし、どこにだって行けるし、
自由でいいなーと、ずっと思ってた。でもね、最近気付いたの。
おそとが自由だと思ふのって、おうちがあるからこそなんだよね。
安穩としてぬくぬくとした、自分の居場所が、根っこがあるからこそ、
翼を広げて、どこにでも自由に羽ばたけるんだって」

そう言ったかと思うと、またもや両手をアタフタさせた。
「ごめん。なんか矢沢の永ちゃんみたいなこと言っちゃったかも。
なんか、どうしちゃったんだろ。ホントごめん。深掘りしないでね」
そして真っ赤な顔をしたまま、立って行こうとしたので、
僕は反射的に彼女の腕をつかまえた。

ひとりになるのは、すごくいやだと思った。
おそとは、会うのもかんたんだけど、去るのもかんたん。
それは、ものすごくいやだという気持ちがこみ上げてきたのだ。

根っこがあるからこそ、翼を広げられる。
おうちがあるからこそ、おそとのよさを学ぶことができる。

「ちょっと、その話、深掘りしてもええかな？」

やまむらみつはる

1970年生まれ。BOOKLUCK主宰。ペーパーメディアの企画・編集・執筆に携わる。旅のささやかで美しい瞬間を写真と文章で切り取ったりトルプレス『Beautiful Moments』を自身の出版レーベルBOOKLUCK PUBLISHING roomよりリリース。http://www.bookluck.jp

つきやまいくよ

絵やパフォーマンス、本の制作など、ジワジワ熱く、マイペースで活動している。メールのタイトルの集積『NEW TITLE』も発売中。その後のあたらしいメールのタイトル（ニュータイトル）もおよそ週に1回更新中。自分の知らない土地で、展覧会をしたいとイメージをふくらますこのごろ。http://ameblo.jp/tsukilemon/